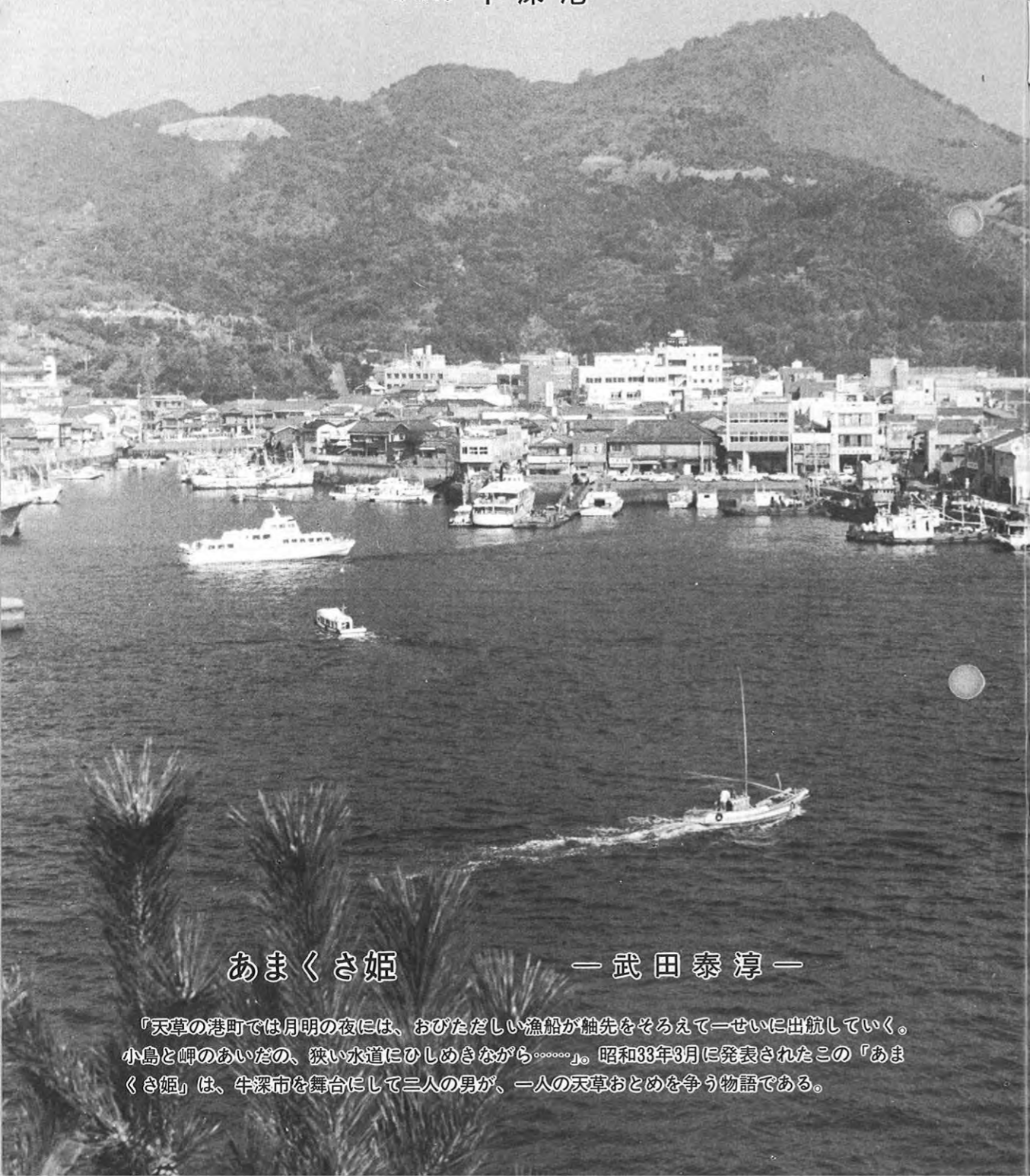




# カメラ探訪

## 文学のふるさと

その16 牛深港



あまくさ姫

— 武田泰淳 —

『天草の港町では月明の夜には、おびたしい漁船が舳先をそろえて一せいに起航していく。小島と岬のあいだの、狭い水道にひしめきながら……』。昭和33年3月に発表されたこの「あまくさ姫」は、牛深市を舞台にして三人の男が、一人の天草おとめを争う物語である。

わたしの  
ふるこの  
郷土

八代市立金剛小 六年 山村友子

ある時先生が、敷川内は金剛町の発展の始まりだぞと言われました。私達は、鼠蔵山や敷川内に古い昔の墓のあることを知っていました。そこで夏休みを利用して、大昔の金剛のことを調べることにしました。

私達の校区の歴史を調べてみますと、数千年間の歴史のあとが集まっている敷川内町や鼠蔵町と江戸時代以後にひらかれた大規模の干拓地にわけられるようです。

私達の金剛で最初に人が住みついたと考えられるのが、五反田貝塚の辺りで、縄文時代の中ごろから終わりごろにかけてだと言われています。

五反田古墳は、横穴式の石室で六世紀の中ばに造られた古墳といわれています。石室内は赤く丹でぬられ、円形の彫刻がみられます。

古墳からは五人の人骨やねじり文様のついた鏡や装飾品が出土しています。この古墳を含む三河内地方を中心にして、古代の八代は栄えたと考えられています。

大鼠蔵楠木山古墳に埋られていた頭がい骨の眼、鼻、口の部分に美しい辰砂が一ぱいつめられていたのはめずらしいことです。

この古墳は五世紀の中ごろから終わりごろにかけて造られたと推定されています。小鼠蔵山古墳群第一号古墳は、羨道のない横穴式系の石室をもつ古墳として、貴重な史跡になっています。第五号古墳からは、小形ながら完全な形の土師埴が一個でています。

私達はこのようなことを調べているうちに今までなにはなしに見過ぎていた古墳や史跡を大切にしなければならぬことがよくわかりました。

それから、大昔の人がその頃海中にあったと考えられる鼠蔵になぜ古墳を造ったのか。大昔の鼠蔵島がどんな役割をしていたのかなど、このようなことも今後調べてみたいなあと思いました。